

『溺愛の誘惑 とまどいの衝動』

著:前田 栄

ill:四位広猫

あまりのショックに言葉を失っている有田に、静かな声で久谷が続ける。

「この状況を打破するために提案があるんだが」

「……………提案？」

一度流れた噂を消すことなど不可能に近い。

でなければ、風評被害で商品が売れなくなった会社が潰(つぶ)れることも、生産者が苦境に立たされることもないだろう。

それをなんとかすると言う久谷を、有田は縫(すが)るような眼(まな)差(ざ)しで見(み)遣(や)った。

「僕としても、勝手に名前が使われて腹を立てているんだ。今の状況が噂を流した人間の目的に適(かな)っているのなら、なんとかして打破したい。そのためには君の協力が必要だ」

「俺の……………協力？」

「ああ。協力してくれるだろう？」

甘い声だった。

少し低めで、自信に満ちていて。彼に協力すればどんな問題でも解決すると、そう信じてしまうような声。

それに引きずられるように頷いた有田の目の前で、久谷が薄く微笑む。

そのいかにも何か企んでいますという顔にハッとして、有田が叫んだ。

「ちょっと待て！ 家のためなら協力したいとは思いますが、できることとできないことが……………」

「そんなたいしたことじゃないさ。ただ、君の協力がなければ上手くいかないだろうというだけで」

「だから、何をっ！」

「恋人になってくれればいい」

サラリと言われた台詞の意味が解らず、有田は呆然と久谷を見つめた。

「じょ……………冗談……………」

「本気だよ」

そう言われたとたん、有田はずりずりと後ずさった。

できれば走って逃げたかったが、未だ足腰に力が入らない。なので、それしか方法がなかったのだが。

「う～ん。まな板の上の鯉(こい)」

「うわっっっ！」

ぐいと足を引っ張られ、その勢いで背後に倒れ込んでしまう。

慌てて頭を庇(かば)い、なんとかぶつけないで済んだとホッとした時には、久谷の手が頭の右と左脇の辺りに置かれていた。

それでも逃れようと身じろいでみたいのだが、足の間には久谷の体があって、どうに

も逃げられない。

「な、な、な、な……………」

「『何をするつもりだ？』かな？」

そう問い返され、コクコクと頷く。

そんな有田ににこやかに微笑みながら、久谷が上体を倒して顔を近付けてきた。

「美(お)味(い)しくいただくつもり……とか言ったらどうする？」

「いや、俺は美味しくないから！」

「それを決めるのは、食べられる側の君じゃなくて、食べる僕だと思うけど？」

「いいや！ 美味しくない！ 絶対！」

力強く言い切ると、久谷は寸前まで見せていた怪しげな雰囲気を一掃し、笑いながら倒れ込んできた。

「やっぱり君はいいなあ」

「……………へ？」

「君と話していると和(なご)むよ」

くすくす笑うその振動が胸にダイレクトに掛かってむずがゆい。

だが、そんなことより……………。

「からかったのかよ！」

「ん？ 本気で襲われたかった？」

顔を上げて暢(のん)気(き)に尋ねてきた久谷に、嚙(か)み付く。

「そうじゃなくて！」

「言っておくけど、『恋人になれ』って言ったのは本当だから。お芝居でだけどね」

「……………は？」

意味が解らず聞き返した有田に、密着したままで久谷が答える。

「一度流れた噂を消すことは難しい。だから、別の噂で上書きする」

「別の噂？ 上書き？」

「ああ。もともと噂が、君が僕の機嫌を損ねたというものだからね。そう見えたけど、実は恋人同士でただの痴(ち)話(わ)喧(げん)嘩(か)だった……という噂を流せば、そちらを皆は信じるだろう。恋愛沙汰の方が、噂をしておもしろいだろうし」

確かにそれなら家業は持ち直すだろう。だが……………。

「でも、俺もアンタもホモだってことになるぞ？」

「この学園では、在学中の同性間の恋愛なんて珍しくもないだろう？ 心配する必要はないと思うが」

確かにそうだが、自分が嫌なのだ。

商売に利用しているという引け目があるので愛想良く接してはいるが、基本的に有田はそういう感情を向けられるのは好きではない。なので、今まであった『お付き合いの申し込み』も総て断ってきたのだ。

それを、なんで今(いま)更(さら)……………。

「珍しくないかもしれないけど、俺はそういうのはちょっと……」

「君が誰の求婚にも頷かない氷の姫君だという噂は聞いた」

「……………氷の姫君」

いったい自分のどこを見て『姫君』なんて言っているのかと、本気でうんざりして有田が呟く。

その声(こわ)音(ね)で心情を察したのだろう。くすくす笑いながら久谷が続けた。
「今まですげなく振ってきた相手のことなら心配ない。厭味くらいは言われるかもしれないが、向こうだって、久谷の御曹司を拒めなんて無茶は言わないだろう」

「そりゃあそうかもしれないけど……………」

「手段を選んでいられるような状況かい？」

「……………」

確かにそうだ。久谷と仲(なか)違(たが)いしたという噂を消してしまわなければ、ウチは破産する。

一時的とはいえホモと呼ばれるのは本気で勘弁してもらいたい話だが、ここで自分が我(が)慢(まん)すれば家業は持ち直すだろうし、自分だって卒業までこの学園で過ごすことができる。

「解った」

しぶしぶ頷いた有田に、久谷は念を押すように尋ねてくる。

「一度始めたら、少なくとも僕が卒業するまでは止めることができないよ。それでもいいんだね？」

「卒業までって……！　なんで、あと二年近くもなんだよ！」

予想外に長い期間に思わず叫び声を上げた有田に、久谷が淡々と続けた。

「いくつか理由がある。僕側の理由としては、君の後(あと)釜(がま)に立候補してくるだろう生徒の相手は勘弁してもらいたいというのがメインかな。早々に別れて移り気だと思われるのも嫌だしね」

「……アンタ側ってことは、俺側の理由もあるんだろ？」

「ああ。僕と別れたら、君にアタックする男が大勢出てくるだろう。そして、彼等は今までみたいに簡単に引いてくれないはずだ」

「なっ……！」

「一度大丈夫だったのなら、二度も三度も平気だろうと思うものさ」

体中に怖気が走った。

彼等は自分に女性にするのと同じことをしたいと思っているのだ。そして、当然、久谷が自分にそれをしたと思いついた状態でやってくるに違いない。

本文 p46～52 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>